

医学研究センター

研究評価部門

赤塚 俊隆

(部門長, 医学部 微生物学 教授)



私が研究評価部門の部門長を依頼されたときは正直言って戸惑いました。副センター長松下先生のお話では、私がそれまで「任期制検討委員会」の「人事考課ワーキンググループ」のメンバーとして、人事考課実施を進めていたこと、特にそこで作成した研究活動自己評価表による研究業績の集積がそのままこの研究センターの部門の活動につながるから、ということでした。確かにそう考えればごく自然の流れのようにも思えました。しかし研究センターの構想が急速にまとめられ、「医学研究センター規程」にこの部門の役割として「研究評価をオープンに行う」と書かれてあるのを見たときはやはり重荷に感じてしまい、誰かに代わっていただくべきではないかと思いました。「人事考課ワーキンググループ」では松谷・別所両副学長の卓越した指導力の下でそのお手伝いをするだけで事を進めることができましたが、いきなり「研究評価を行う」という立場におかれたと考えると戸惑うのは無理ないことだと今でも思います。しかしさらに構想が具体化され、第2次長期総合計画「飛躍」では「大学評価部門や病院機能評価と連携しつつ、各人の研究業績を集約したデータベースを構築する」といった作業が明記され、さらに「これに基づいて成果を厳正に評価するシステムを構築し、真に成果を挙げているチームには称揚してその更なる推進を図るとともに、レベルの今ひとつであるチームにはいっそうの努力を求める。」とありました。そこで、自分が任された部門では教員の評価を行うというよりも、種々の評価に必要なデータを集積し利用可能な形で各方面に提供するというのが任務であると理解するようになりました。

そういうわけでまず研究業績データベースを作ることを最初の課題として進めることになりました。仕事に取り掛かって初めて分かったのですが、本学で研究業績データベースが構築されていないことが、例えば研究センターの活動に是非必要とされていた「知財管理アドバイザー」の派遣応募、大学院教育に関連したグラント申請、等々にとっての大きな障害になっていることが浮かび上がってきました。学外に目を向けてみると、国が知財立国構想を急速に進め、多くの大学が再編の波の中で生き残りをかけてそれに対応しようとし、そこでは業績データが必須のものとなっていることを知り、自分の任務の重さと緊急性を感じさせられました。

多くの方はこのデータベースの作成は、EndNoteやReference Managerといった文献整理ソフトにデータを入力していく作業と似たようなものだと思います。最初は私も山内センター長もそのように思っていたと思います。適当なソフトを選定し、それに誰かがデータを入力していく、あるいは各教員が自分のコンピュータからオンライン入力していくということで、急げば半年もあればできるだろうという甘い考えを抱いていました。ところが既にデータベースを構築し学内外に公開するだけでなく、産学連携を目指して様々な研究シーズの広報をHPに載せている札幌医科大学の担当者に話を伺ってみると、それまで5年の歳月と1千万円以上の費用を要していること、教員からデータ入力の協力を得るのに苦労があり、定期的に入力をお願いするだけでなく、専任の補助員がほぼ毎日更新したり、PubMedからダウンロードできるシステムを開発したりしているとのことで、その苦労を垣間見た気がしました。そして実際その後自分たちが経験したのはそのような苦労の連続でした。まずソフトといっても用途にマッチしたのは見つかりそうになく、業者の説明を聞いたり、他大学へ見学に行ったりしましたが、やはり大学ごとに仕様が異なるようで、出来合いのをそのまま使うということではすまないことが分かってきました。本学では教員人事考課のための研究活動自己調査表の作成、文科省等への調査票提出、特定機能病院報告書作成、年報・病院要覧作成、ReaDへのデータ提出、といった用途がありますが、それぞれデータの抽出法や出力フォーマットなどが異なり、その全てに対応できるソフトを開発するとなると札幌医大同様、最低数年以上の時間と労力、そして多大な経費がかかると思われます。まずはEduce社の「研究

業績プロ」というソフトを選定し導入いたしました。正式導入までに半年かかりました。すでにH17年度の人事考課実施と大学評価受診が間近に控えていて、正式な決裁を待たずに業者と協議を開始し、研究活動自己調査表の作成に使えるようカスタマイズを行いました。初年度はソフトに直接データを入力できず、エクセルのデータ移行ワークシートに入力していただいたのを集めてEduce社でソフトに移行するという形になりました。その方式が確定し、データ入力の依頼が教員に通達されたのがH18年8月11日で、それから2週間の間にデータを入力していただくというあわただしいことになってしまいました。夏休み期間中ということもあり、この短期間に実施することには多くの苦情が寄せられました。もっと早く知らせてくれないと困るとのお叱りでしたが、我々としてはあれが精一杯だったと思います。準備段階でも大変でしたが、8月から9月初めにかけて担当者はまさに不眠不休でした。そんなときに部門長の私が急に入院する羽目になり、さらに彼らを忙しくさせてしまい申し分けなく思っています。

ここで部門の関係者を紹介いたします。副部門長として医学情報施設の椎橋先生と川越総合医療センターの伊崎先生に加わっていただきました。椎橋先生はデータベースの開発・運用には欠かせない存在であることはいうまでもありません。伊崎先生は地理的な関係からそういったデータベース関係の仕事ではなく、現在学内グラント部門と一緒に医学会の雑誌編集の仕事を行っていますが、そちらを主に担当していただいています。そして実務作業はもっぱら事務部門の伴場さんと山田さんに行っていると思います。データ入力に関して種々の問い合わせや依頼・苦情に対応しているのもこのお2人です。

その後データベースはH19年1月に学内公開し、この夏にはH18年度人事考課、特定機能病院報告書作成、Readへのデータ提出等のため再び全教員にデータ入力をお願いしました。人事考課表作成だけをとってもまだまだソフトの機能が不十分で、不便さを感じられる方も多いと思いますが、用途をそれ以外に広げようとする途端にソフトの未熟さが露呈してしまいます。例えば特定機能病院報告書作成では各診療科の先生方の業績から重複しないように論文を選び出して、どれほどの先生の主たる業績として提出するかを決めたりする作業を全て手作業で行っておりますし、現在Readのシステム変更を行っている科学技術振興機構(JST)との間で事前のやり取りを行ったり、激しく入れ替わる教員の情報を更新したりと、非常に膨大な作業を担当者が行っています。現在ではデータベースそのものよりも担当者の頭脳の方が、本学の業績データベースとして機能しているようにも思えてしまいます。しかもこのような部外者には見られない激務をこなしながら、一方で問い合わせや苦情に対応している姿には本当に頭が下がる思いです。

多くの教員の方たちは入力の要請があるたびにわずらわしく感じ、かつシステムの不便さも感じられていることと思いますが、大学としてこれを構築して学内外に提供していくことは急務ですので、なにとぞ御理解とご協力をいただきたくお願いいたします。部門としてはさらに情報を学外にも様々な形で公開して産学連携推進などに貢献したいと思いますが、他の部門や多くの教員との協力が不可欠だと感じています。